

壺形埴輪と東関東の前期古墳

—土師器とは異なる壺形埴輪の周知とその系譜—

田 中 裕

目 次

1. はじめに	139
2. 壺形埴輪の認識と論点	139
(1) 壺形埴輪と底部穿孔壺・二重口縁壺	139
(2) 壺形埴輪の指標	140
(3) 壺形埴輪の波及に関する研究	141
3. 五領式の壺	143
(1) 壺の主要な二者	143
(2) 東日本は平底の世界	144
4. 東関東の壺形埴輪	144
(1) 大型古墳の壺形埴輪	144
(2) 小型古墳の壺形埴輪	149
(3) 東関東における壺形埴輪の性格	151
5. 壺形埴輪の系譜とその意味	152
(1) 壺形埴輪の多様性	152
(2) 円筒（器台形）埴輪共伴例との違い	153
(3) 「長頸」の壺形埴輪の系譜と変遷	155
(4) 壺形埴輪の多様性が意味するところ	156
6. まとめ	157

1. はじめに

「壺形埴輪」あるいは「埴輪壺」と呼ばれる遺物群は、古墳時代前期の東日本を考える際、一つの鍵となっている。しかし、このことは周知のこととはなっていない。古墳時代研究者を除くと、ほとんどの研究者はその存在すら知らないのが実状である。

この「壺形埴輪」について、例えば都出比呂志は、前期古墳において壺のみを形象する埴輪が東日本に多いと指摘し、壺と器台を形象する埴輪が多い中央と地方との格差として理解しようとする（文献1）。一方、白石太一郎は「東日本型壺形埴輪」という、東海を中心とした東日本独自の「壺形埴輪」が存在すると考え、巨大古墳の成立を契機に近畿の一部古墳から出土する事実から、東海と近畿の二極であった政治的関係の変化を読み取ろうとする（文献2）。このように、政治性が強いとされる古墳の外表面施設（遺物）に大きな東西差があることは、歴史的に重要な意味をもつと考えてよい。

「壺形埴輪」が調査態勢の整う大型古墳で見逃されることはまずないであろう。しかし、他遺構に混じって周溝だけが検出される小型古墳の場合では、出土量や遺存状態が十分とは限らないので、担当者がその存在を念頭に置いていないと識別されず、多くの場合、土師器の壺と考えられるであろう。このとき、小型古墳が後期古墳であるという先入観があれば、例えば周溝覆土上位に転落した例などは、遺構と時期が異なる「混入」遺物と判断され、古墳から出土した遺物として報告されない事態もありうる。

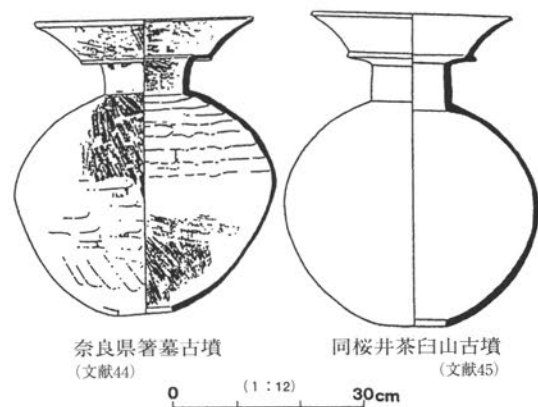
こうした事態を防ぐため、小稿は第一に「壺形埴輪」が集落出土の土師器とは異質の遺物である点を確認し、小型古墳から出土する場合もあることを東関東⁽¹⁾から示して、問題意識を研究者一般に共有してもらうことを目的とする。その上で、次節に記す論点から東日本の前期古墳について特性を考察する。

2. 壺形埴輪の認識と論点

(1) 壺形埴輪と底部穿孔壺・二重口縁壺

埴輪が中国地方の弥生墳丘墓に供された特殊器台・特殊壺から生じたことを解明したのは、考古学史上の金字塔というべき成果である（文献3）。円筒埴輪に至るまでの安定的な型式変化が証明され、それゆえ、この直系に連なるもののみを埴輪とし、ほかを埴輪とは呼ばない動きが広がった。

最初の巨大古墳とされる奈良県箸墓古墳では、後円部から特殊器台形埴輪と特殊壺形埴輪、前方部からそれとは別の、丸底に大きな円孔が開いた巨大な「壺」が出土している。特殊壺とは外形が異なるとともに、胴部が無突帯・無文であるなど、細部まで相違が明瞭である。この巨大な「壺」は、同県の桜井茶白山古墳例により認知されたため、「茶白山式壺」や「茶白山型二重口縁壺」



第1図 初期の壺形埴輪

等と呼ばれる（第1図）。奈良県の布留式に含まれる有段口縁壺に類似するが、一方で集落出土の一般的な壺とは大きさや作りがまるで違うものである。しかし、特殊器台・特殊壺のように一般の土器とは異なるものとして明瞭に区別されるまでには至らず、これを埴輪と呼ぶことに躊躇があることも事実である。

箸墓古墳のほか、特殊器台の直系に列せられる都月型の埴輪を有する古墳に、岡山県都月坂1号墳や京都府元稲荷古墳がある。両古墳の特殊器台の末裔に伴ったのは特殊壺形埴輪ではなく、「布留式と呼ばれている土器に著しく類似した」（文献3）と評価された壺形埴輪である。これが特殊壺の系譜でなく、「茶臼山型二重口縁壺」の系譜であることは明らかである。朝顔形埴輪の中にはこの「壺」と「特殊器台形埴輪」との組合せが祖形になったものがあるとの指摘があるように（文献4）、この「壺」と埴輪の親縁性は高いといわざるをえない。

東日本の例でみると、長野県森將軍塚古墳では出土位置、大きさ、製作技法、胎土・調整・焼成などの質が円筒埴輪や朝顔形埴輪とほとんど同じ「壺」が出土している。形態は特殊壺に連なるものではなく、特殊壺の系譜を重視する見方では必ずしも「壺形埴輪」と呼べないかもしれない。現に、埴輪から切り離して底部穿孔壺、あるいは二重（複合）口縁壺など、それぞれ異なる範囲の土器類に含めて考えようという動きがあり、むしろ主流である⁽²⁾。しかし、この「壺」は円筒埴輪等と同じ古墳外表施設という特殊な目的を帯び、質的にも同じで、製作集団は同一とみられる。形状が壺であるという一点をもって無条件に埴輪から切り離し、別の遺物群に含めようというのは、穏当な手続きではない。

このように、円筒埴輪と同質の「壺」が、円筒埴輪に共伴した場合でも「壺」を埴輪と認識することが躊躇されている。「壺」だけの出土例は、なおさらである。しかし、極端な例でいえば、長頸化や長胴化を経て筒状に変容した特殊な「壺」が古墳から多数出土することがある。これらについて、より円筒埴輪に近い形へ変化したものだという印象は、誰もがもつところではなかろうか。

底部穿孔壺という類別には、そもそも問題がある。底部穿孔は二重口縁壺に限って行われるわけではない。小型の単口縁壺（直口壺などを含む）、小型丸底鉢、高杯、そして甕までもが穿孔された状態で該期古墳から出土する。それらとの関係を棚上げしたまま、二重口縁壺の底部穿孔のみを抜き出して論じるのは、片落ちとの批判を免れまい。底部穿孔が一元的にとらえられるほど特殊な行為ではなく、頻度に波はあるが、多元的に発生しうる普遍的な行為ではないかという根本的な問題も残っている。

壺形埴輪の祖形となる底部穿孔の壺が、古い段階に存在することは認められる。しかし、いったん埴輪化した壺のほかに、一般的な壺が定着して作られているのなら、後に穿孔されて葬祭に用いられることもありえよう。よって、可能な限りそうした底部穿孔の壺と、壺形埴輪は峻別して別に扱う必要がある。

（2）壺形埴輪の指標

塩谷修は壺形埴輪の定義として、

- 1) 底部に焼成前の穿孔を有する
- 2) 頸部から屈曲して外反する有段口縁、二重口縁⁽³⁾を有する
- 3) 同一古墳における同一規格をつよく意識して製作されている
- 4) 墳丘上、墳丘裾部に配列される

等⁽⁴⁾を指標に挙げる（文献8）。

上記指標のうち、埴輪と同じ扱われ方を示す、墳丘への配列は重要な指標である。いわゆる「圍繞配列」

を最大の要素に挙げる意見は強い⁽⁵⁾。ほかの3点は遺物そのものの特徴である。遺物の特徴であれば、一定の出土量があれば判別できよう。これらが「必要条件」といえる。

しかし、この「必要条件」において、配列に関しては基部が並んで出土しない限り疑いの余地が残り、証明が難しい。周溝出土土器から配列を想定できるという段階で、よしとせざるをえない場合が多い。遺物の特徴に関しては、焼成前穿孔が明快な指標であるほかは判別困難な曖昧例が多く、単口縁でも壺形埴輪に比定すべき資料があるなど（文献12）、細部で適用に困る多くの問題が残ってしまう。

また、先ほど述べたように、セットを度外視した分析は資料の質を歪めることになる。円筒（器台形）埴輪伴出例は、質が明瞭に異なる場合を除いて、その埴輪組成から切り離さずに、埴輪の一部として扱うべきであろう。つまり、円筒埴輪とセットという点が、埴輪としてすでに十分な条件である。

関東に例が多い、壺形埴輪の単独樹立例はどうか。この種の遺物で長胴化が目されるのは、形態が特異であるからではなく、円筒

埴輪に近い形で直立するからである。したがって、直置きの場合、底の特徴が埴輪としての機能を考える上で重要となる（第2図）。平底土器は底部から積み上げて作る手法が一般的である。焼成前に穿孔する場合、平底を整形したあとに外縁形状に沿って正円形に開けるのが一般的である（底部a1, a2）。

これに対し、以下の場合には容器の壺として底部整形が行われていないか、その痕跡をとどめず、製作開始時点ですでに特殊な製品を製作する意図が明確であり、転用や変更によるものではないと考えられる。

イ) 底部開放状態で積み上げられる場合（底部c1, c2）

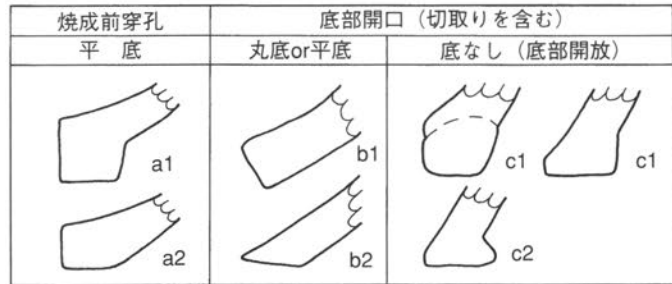
または焼成前切取りとされる場合でも、

ロ) 設置を前提として接地面が水平に切り取られる場合（底部b2）

ハ) 一次乾燥前の不安定な柔軟状態で切り取られる場合（底部b2とb1⁽⁶⁾の一部）

すなわち、製作初段階からの底部開口を壺形埴輪の「十分条件」ということができる⁽⁷⁾。

なお、上記と同様の理由で、器壁に埴輪と類似の透し孔が施される場合も「十分条件」に数えられる。また、埴輪は一般的に胎土の粒子が粗く、厚い器壁で、太く明瞭なハケが付けられる傾向が強い。こうした埴輪のもつ質に類似するか否かは参考指標⁽⁸⁾となる。



第2図 壺形埴輪の底部分類図

（3）壺形埴輪の波及に関する研究

塩谷修は壺形埴輪の祖形・初源が大和の地にあるとして、その展開を次のように整理する（文献8）。
 0期 祖形, I期 埴輪化（配列形態確立, 北部九州への波及）, II期 口縁部の外傾（東日本への波及）, III期 球形から長胴へ・口頸部の簡略化, 終末期（～5世紀第1四半期）長胴化が進行し大型化
 以上の過程により、ヤマト王権の中核で成立した壺形埴輪が、古墳そのものと同様に政治的なつながりを通じて地方でも作られ、古墳に並べられたと考えた。祭式には二系譜があり、壺形単独で構成されるもの（塩谷のいう壺形埴輪A）と、円筒（器台形）埴輪を伴うもの（塩谷のいう壺形埴輪B）があるとし、前者は九州と東日本に展開、後者は近畿・吉備・出雲に展開したとして、両者を出自・階層の相違の表象と考

えた。この考えは、冒頭に紹介した都出比呂志の見解をより具体的に描いたもので、とくに壺形埴輪を円筒埴輪と同時に成立した、別系譜の「埴輪」とみる考えは重要である。

円筒埴輪と共伴する例と単独で樹立される例の関係について、稲村繁は「前期末から中期の初頭にかけての円筒埴輪に伴う壺というのは、その時期に当然胴部が極端に長胴化した壺形埴輪が出現しているにもかかわらず、円筒埴輪に伴うのは球形の胴部の壺形埴輪ということで、どうも関東地方の中でも壺形埴輪に関しては極端な長胴化した壺形埴輪というのは、それだけが円筒埴輪とは違った系譜で入ってきている可能性が高い」（文献14）と述べ、両者を別系統と考えた。

一方、比田井克仁は、基本的に壺形埴輪を土器と区別しない立場で、二重口縁壺（小稿の有段口縁壺）の東国波及を論じている（文献16）。この中で示された畿内系と伊勢湾系の波及モデルによると、関東には第4図A・B類（畿内系）の波及・定着に始まり、遅れてC類（畿内系）、そしてD類（伊勢湾系）が波及したという。小稿に関連して注目されるのは、B類（直立筒状頸部）が東日本で集落に定着後、それが畿内で衰退した後も関東では現役を続けるとした点、そしてB類は小規模墳墓に供献されるほど在来化するとした点である。また、畿内系のC類は政治性を背景として上位者に波及し、同時にC類とは対抗的な関係にある伊勢湾系のD類が、C類より下位の首長に数多く波及したと指摘した点である。

このうち、有段口縁のC類とD類については、一見して気づかないような土器の微妙な相違に、「対抗的」というほどの政治的意味を込めることが行われるのか、いささか疑問である⁹⁾。また、例えば房総半島ではC類が非常に少ないので¹⁰⁾、この地域の首長は身分が低い対抗勢力側ということになるが、逆にいえば畿内の指導力が働かない自立的地域ということにもなる。このことは、関東の中で房総半島が比較的早く前方後方墳から脱却し大型前方後円墳へと移行する事実と、即座に整合するわけではない。

この点を除くと、近畿地方で衰退した器種が他地域で定着・在来化する点、在来化した一般の土器が古墳に供献される場合がある点、古墳の土器が集落の土器とは異なるものになる場合がある点、階層により供献される系譜が異なる場合がある点を指摘したことは卓見である。塩谷が指摘した壺形埴輪二系譜のほか、比田井が指摘するような各地域の土器の系譜がさらに加わりうるという視点は重要である。

埴輪と古墳規模・墳形の関係について、器台・円筒形を併せて受容するのは前方後円墳であるとともに、壺形のみを受容する前方後方墳においては「より大規模な墳墓では伊勢型二重口縁壺が、小規模な墳墓では畿内系二重口縁壺が用いられている」と君島俊行は指摘する（文献10）。この指摘は比田井の指摘と共通する部分があり、一定の傾向を捉えているのであろう。ただし、関東の前方後円墳では、円筒・器台形埴輪を有する例より壺形埴輪のみを有する例のほうが多く、埴輪そのものが確認できない例はさらに多いので、墳形との関係を相関関係とまでは評価できない。また、資料的に新皇塚古墳例を「伊勢型」に含めてよいのか疑問がある。「伊勢型」を集成した新名強（文献6）も懐疑的であるように差違は大きい。無条件には認められず、たとえ同系譜としても、形式的に差違を埋める中間資料がいくつも必要となるのなら、系譜の故地がどこであったか、という意味は薄れるであろう。そういった問題はあるが、大型古墳に有段口縁のD類、小型古墳に同B類といったような、古墳規模と壺形埴輪の種類に偏りがあるのなら、塩谷の指摘するところである、壺形埴輪の政治的性格を追認することになる。

このように壺形埴輪は少なくとも二系譜があり、身分や出自の表象など、政治的な意味を反映するものと理解されている。ニュアンスは異なるが、これをヤマト王権の身分秩序に各地の古墳造営主が組み込まれた証拠とみるか、あるいはその傘下において対抗的な勢力の存在を示す証拠とみるかで分かれている。

果たしてどちらが正しいのか、そのどちらでもないのか、以下、東関東における実例から考察する。

3. 五領式の壺

(1) 壺の主要な二者

東関東における壺形埴輪の実例を検討する前に、それとは区分されるべき地元の古式土師器、すなわち五領式に含まれる壺について触れておきたい。

五領式の壺は極めて多様である。これほどの多様性は甕にはみられない。壺の多様な機能に起因するとともに、地域性豊かな弥生土器に源を発し、故地においてすでに他地域の影響を受け、さらに移動して影響を与え合い、複数系統が併存する形で定着したことが主な原因とみられる。ゆえに、系統の整理は困難を極めており、体系的な共通理解は熟成されていないのが現状である。

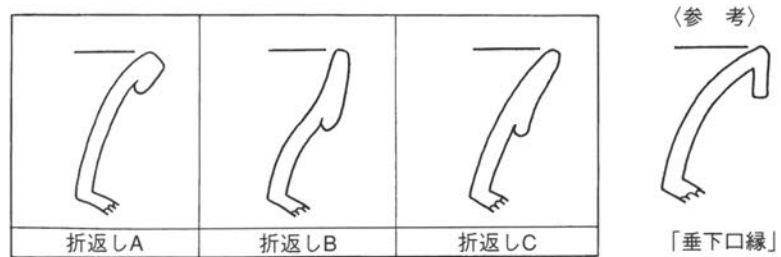
多々ある壺の中で、小稿では後の立論に関わる比較的大型のもの、すなわち一般的に識別されている二重（複合）口縁壺⁽¹¹⁾の主要な二者を紹介して、先に進む。

東関東で数量的に多いのは次の二者である。関東一円でもほぼ同じ傾向があると考えている。

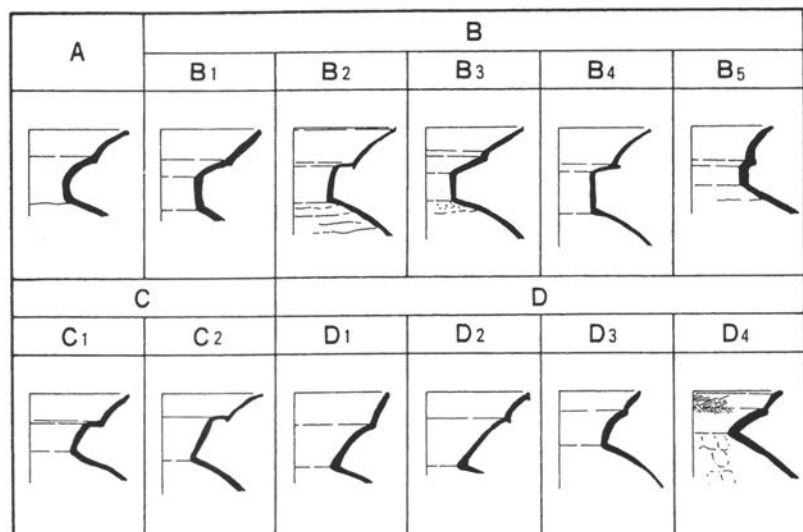
1：折返し口縁壺

2：有段口縁壺

1は在来の後期弥生土器の流れを汲む壺である。南関東系（久ヶ原式・弥生町式）や、北関東系土器に認められる、折返しや粘土帯貼付けによって厚みに段差をつけ、口縁を二重に見せる装飾である。頸部が「く」の字に屈曲してからラッパ状に開くのが特徴で、A：折返しが短く、口縁が外反する壺、B：折返しが長く、口縁端部が内湾して上を向く壺、C：折返しが長くて、折返し下部ほど厚く、口縁は直線ないし外反する壺、の3種がある。以下、これらを「折返し（口縁）A」等と呼ぶ（第3図）。最も装飾的要素を残すのは折返しBで、棒状浮文を有する率も高いが、次第に減る。折返しCはA・B及び外来要素を合わせて生じる後出的なもので、五領式に特有の代表的な折返し口縁壺である。



第3図 折返し口縁（五領式期）分類図



第4図 有段口縁分類図（文献16より）

2は口縁部に段をもつ、近畿の流れを汲むとされる外来系の壺である。かなり多様性があり、先に紹介した比田井克仁は大きく(第4図)、A類：頸部が丸く屈曲するもの、B類：頸部が直立して立ち上がるもの、C類：頸部が直線的に逆ハの字形に開くもの、D類：頸部と口縁部が緩やかな弧を描いてラッパ状に開くもの、の4つに分類する⁽¹²⁾。小稿ではこれらを「有段(口縁)A」等と呼びかえる。なお、東海⁽¹³⁾では近畿の影響を受けて「伊勢型二重口縁壺」が成立するといひ、有段Dがこれに当たるという。

さて、関東の五領式は東海の影響を強く受けて成立したが、器種によって影響の受け方は異なる。五領式における甕⁽¹⁴⁾、高杯、器台、そして小型の単口縁壺(直口壺やヒサゴ壺を含む)は、東海の影響に似ている。しかし、大型の壺や装飾壺は必ずしもそうではない。

壺の口縁を二重に装飾する手法は、弥生時代末に各地域で独自の展開をみせたが、東海の「パレス壺」はその代表例の一つである。優美な「パレス壺」は、関東でも一部の遺跡で模倣品が出土し、確かに東海の影響は壺にも及んでいる。しかし、例えば房総においては、市原市長平台遺跡例のような忠実品は極めて稀有な例で、著しく変容した文様帯をもつ壺片が散見されるに過ぎない。その破片すら、当該期の1遺跡に1点出土するかというと、到底出土しない。関東の他地域では、前方後方墳・小規模方墳群で「パレス壺」が集中して出土した例⁽¹⁵⁾もあるが、一般的には墳墓と集落遺跡の双方においてともに主体的存在とまではなっていない。関東よりむしろ東北の福島県の方が認められるくらいである。若干の地域差はあれ、東海を代表する壺はあまり根付いていないのが実状である。

以上、五領式における比較的大型の壺は、在来系と近畿系とされる上記の二者にほぼ集約される。壺形埴輪と混同される最大の要因になっているのは、二者のうち、近畿系とされる壺の存在である。

(2) 東日本は平底の世界

東日本で口縁壺が出土すると、私どもはすぐに近畿の布留式あるいは布留系の土器と考え、近畿の編年と比較しがちである。しかしよく資料を見ると、その姿勢が過ちの素であることに気づく。

西日本において、布留式の影響が強く働いた地域では、基本的に丸底の世界が変わる。甕、小型土器群はもちろん、壺の大半も例外ではない。一方、東日本で出土する口縁壺の大半は、平底である。口縁壺が近畿起源であるとしても、東日本で丸底化しない事実を考慮すれば、それは東日本に根付いた地元の土器と考えるべきであろう。東日本の研究者はしばしば、すべての文化要素が西からの外来によるという錯覚に陥りがちである。確かに多くの文物が外来の影響を受けて変化するが、それらは定着とともに自らの文化となる。独自の伝統を形成する場合は、中央の強い規制や直接の政治的関係を背景に土器を製作したという状況を想定することは難しい。早期の定着、系統の派生をしっかりと評価する必要がある。

4. 東関東の壺形埴輪

(1) 大型古墳の壺形埴輪

房総半島は前期古墳の確実な円筒埴輪出土例がまだなく、その意味では東日本を代表する地域である。この房総半島と、その北側に広がる印旛沼・手賀沼から霞ヶ浦に至る内海の沿岸を加えた東関東では、逆に良好な壺形埴輪がみられる。これらのうち、小稿では「十分条件」を満たす壺形埴輪に焦点を当てる。

良好な資料は新皇塚古墳、大厩浅間様古墳、しゃくし塚古墳、上出島2号墳、香取神社古墳など比較的大型の古墳（すなわち首長墓）で多く認められる（墳丘：第5図、埴輪：第6・7図）。

新皇塚古墳（千葉県市原市菊間：文献18）

前方部が削平されたとすると、後方部長は約40mであることから墳丘長60m以上という房総最大の前方後方墳と推定される。墳頂部に長大な粘土槨2基を有する。まず南槨（棺長9.8m：小型仿製珠文鏡・凝灰岩製管玉5・ガラス小玉・短剣・大刀・刀子・鑿・大型ヤリガンナ・直刃鎌・袋状鉄斧出土）、そして北槨（棺長10.7m：小型仿製内行花文鏡・凝灰岩製石釧・凝灰岩製管玉94・水晶製勾玉・琥珀製勾玉・剣・刀子3以上・ヤリガンナ・棒状鉄製品・直刃鎌2・鉄先・袋状鉄斧出土）の順に営まれたと報告される。棺の断面形状は丸いので、極端に長い割竹形木棺や舟底状の木棺が想定される。前期後半の所産である。

報告では、壺形埴輪（第6図1～14）は径21cm～28cmの有段口縁を有し、ハケのちナデにより器面がなめらかに調整される。胎土は細砂粒を含む土師質である。鮮やかな色調で、外面と口縁部内面途中まで赤彩が施される。高さは28cm～31cmで、頸部が長く（段の上部と頸部の比が1：2か2：3）、胴部は球または下膨れ形、底部は底面が不明瞭な焼成前穿孔で（底部a2またはb1）、孔の切抜き面にヘラケズリが施される。口縁端部が外反するものと内湾するもの、つまみ上げをするものとしのないものなど、多様である。胴部側面に径2.8cmの焼成前穿孔（14）があるとされ、径からすると、透し孔をもつ可能性がある。

大厩浅間様古墳（千葉県市原市大厩：文献19）

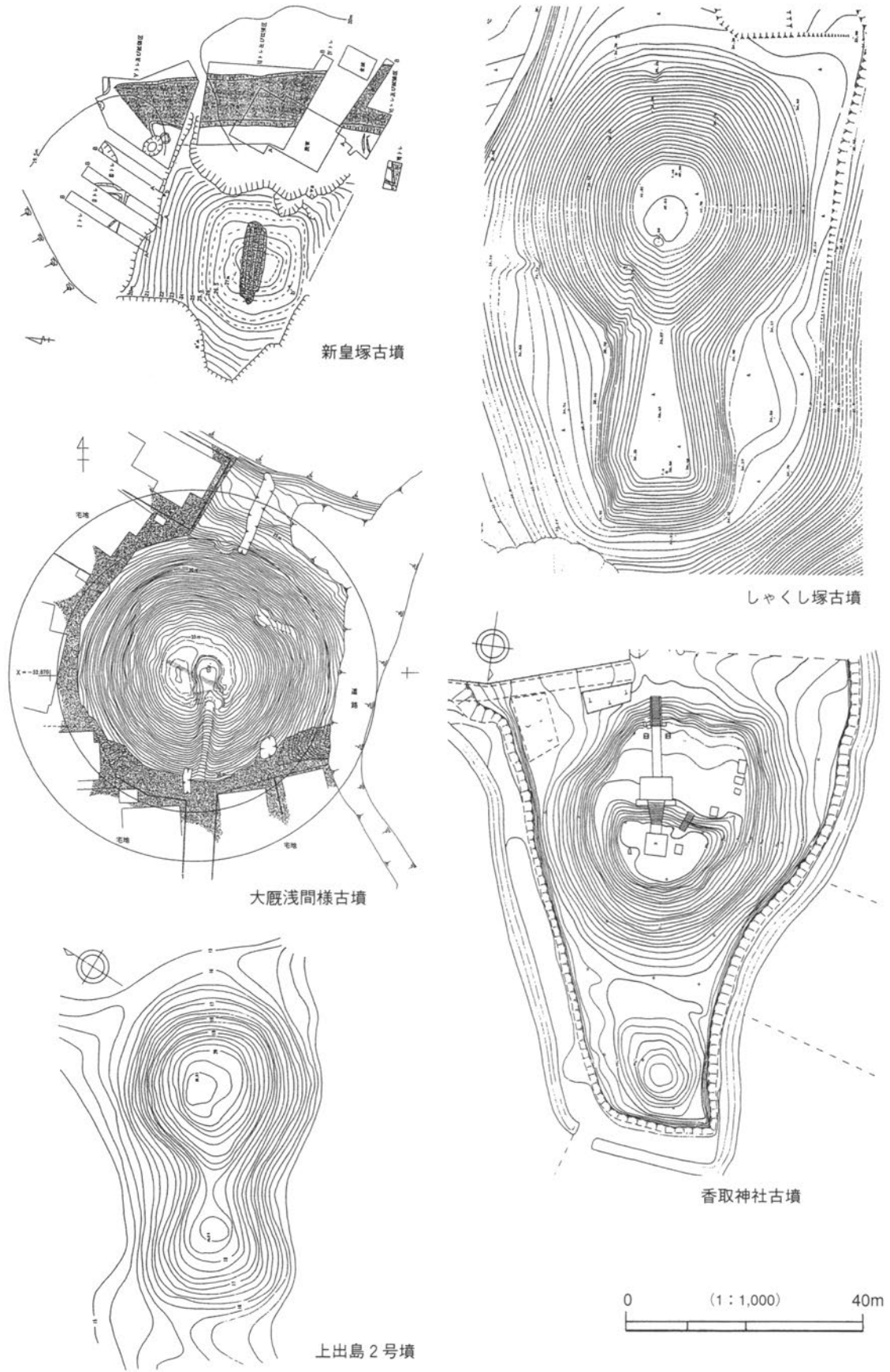
径45mの大型円墳である。墳頂部に埋葬施設3基を有する。中央施設は1号主体である。棺床は平らで、極端に長大な箱形木棺直葬（棺長11.3m：小型仿製珠文鏡・凝灰岩製石釧・メノウ勾玉2・琥珀勾玉8・琥珀棗玉4・琥珀丸玉3・琥珀小玉17・ガラス勾玉・ガラス三連小玉・ガラス小玉32・管玉55）と想定される。前期後半の所産である。2号主体（棺長4.7m）と3号主体（同2m以上）は中期の所産である⁽¹⁶⁾。

報告では、壺形埴輪（19～46）は破片のため数が多いが、全体形の復原は困難である。径30cm前後の折返し口縁が主体的で、有段の破片もわずかな屈曲しかもない。段部～口縁部の高さは8cm～10cmの例が多い。接合しない同一個体片から、径43cm、高さ20cm等の巨大な口縁部の存在が報告されたが、口縁端部は小片なので位置関係には不確定要素がある。口縁の調整は、外面に縦・斜めハケ（一部鋭いヘラナデ）、内面に横・斜めハケが施されるもの、内外ともヘラナデに覆われるものがあり、端部は最後にヨコナデで仕上げられる。胴部は内外ともヘラナデが施されるが、下腹部で製作単位が分かれ、その下側部位にはハケが残る。形状はなで肩で長胴気味である。胴部に竹管状工具による線刻1例が含まれる。赤彩の例は報告されない。底部は焼成前に切り取られたと思われ、平底の面は観察されない。何度も切り取り面を抉った痕跡があるものや、地面に対して水平に切るもの、粘土が潰れて横にはみ出ているものがあり、製作当初から樹立を前提とした成形をしている（底部b2）、などの壺形埴輪の十分条件を満たす。

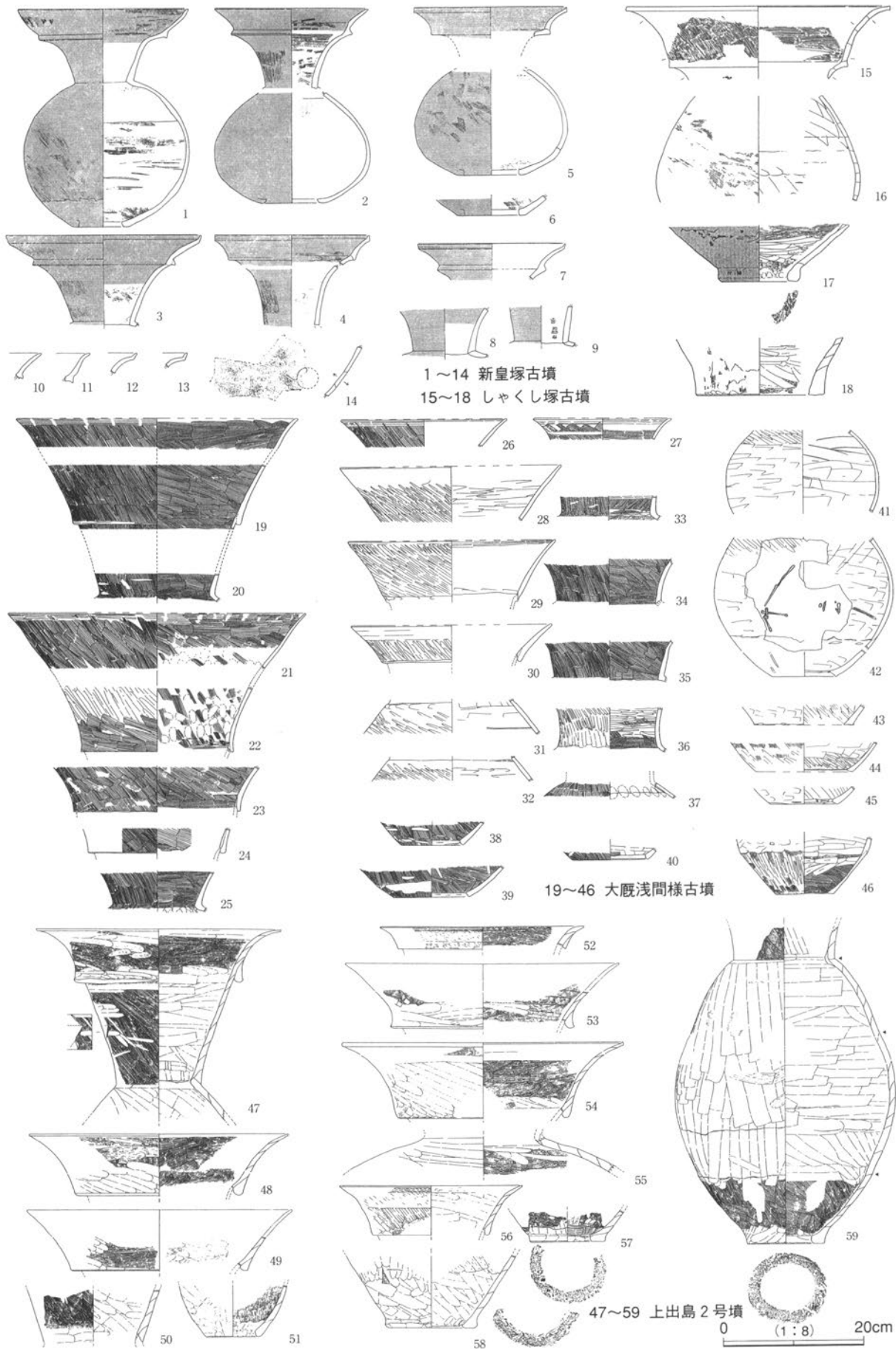
しゃくし塚古墳（千葉県香取郡多古町：文献20, 21）

墳丘長83mの前方後円墳で、同じ柏熊古墳群所在の柏熊1号墳（おけ塚古墳）と並んで香取地域最大の前期古墳である。未発掘であるが、萩悦久らによって良好な採集資料が報告されている。採集地点は墳裾、くびれ部斜面、前方部平坦面外縁などであり、墳頂外縁からの転落や各部への配列が想定される。

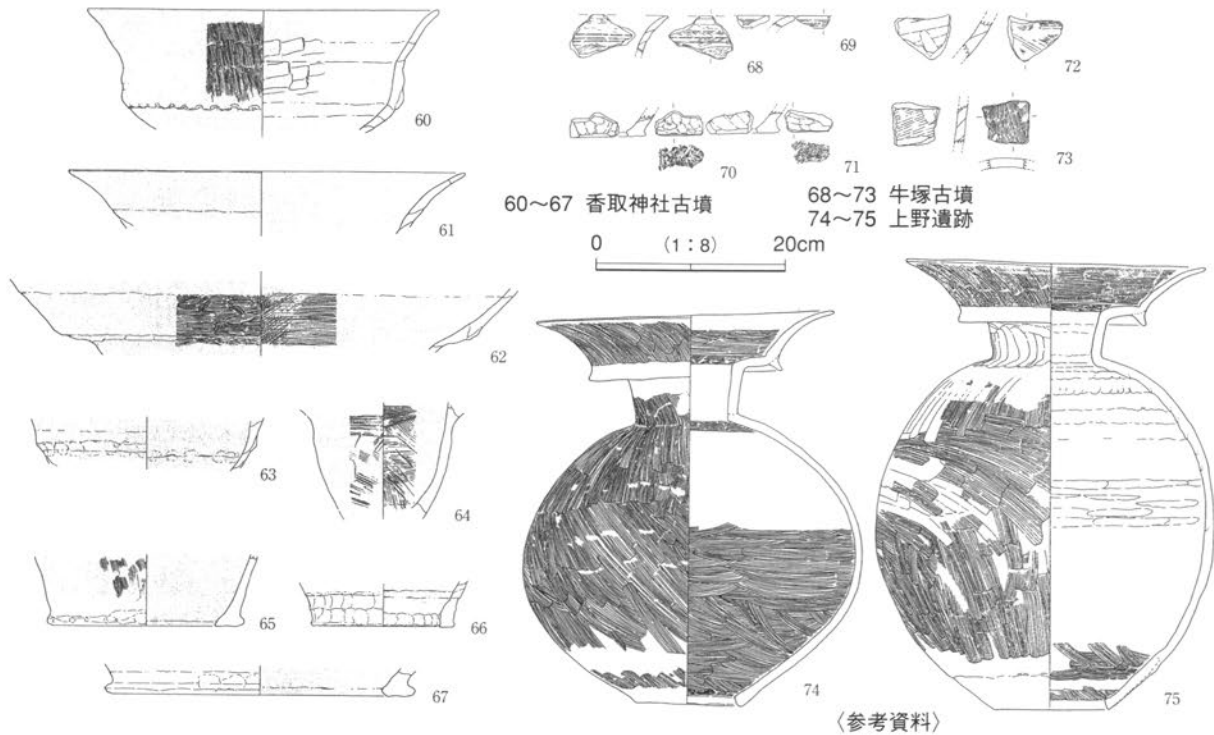
報告された壺形埴輪には、口径37cm以上の大型有段口縁がみられる（15～18）。口縁端部のつまみ上げはない。口縁部外面に縦ハケ、内面に太い横ハケが整然と施され、胴部・底部外面に斜めハケのちナデが施されている。また内面に輪積痕が少し見られ、内面底部付近はハケが明瞭に残る。胎土は精良な例に混



第5図 東関東の壺形埴輪出土古墳（大型古墳）



第6図 東関東の壺形埴輪 (大型古墳その1)



第7図 東関東の壺形埴輪（大型古墳その2）

じってやや粗い例もあり、外面を赤彩する・しない、段部の突帯が垂下する・しないなどの多様性がある。頸部に突帯をもつ資料がある。なで肩で下膨れの長胴である。開放状態で積上げる成形技法で、周囲をよく調整し、自重による底部の潰れで粘土が横にはみ出すことのない底部c1である。なお、併せて円筒埴輪の存在が想定されているが、確実な例は報告されていない⁽¹⁷⁾。

上出島2号墳（茨城県岩井市上出島：文献22, 23）

墳丘長56mの前方後円墳である。現在の利根川左岸、かつての内海では西北最奥部に位置する。後円部墳頂に粘土槨があり、舟底状の木棺が安置されたとみられる。副葬品として、軟玉製勾玉2・蛇紋岩製等管玉5・鉄剣2・鉄斧・柳葉形鉄鎌5・鳥舌形鉄鎌・鉄鎌2・鉄針・鉄ヤリガンナ2が出土した。壺形埴輪は後円部墳頂、後円部北側、くびれ部北側、くびれ部南側などから出土している。

壺形埴輪は口縁部が径26cm~40cmであり（47~59）、折返し口縁と近い形状をもつ。有段とされる破片でもわずかな屈曲しかない。段部~口縁の高さは7cm~10cmに対し頸部高は15cm前後と（段から上と下の比1：2）、明らかに長頸である。胎土は比較的密であるが、いわゆるスコリアを多く含み、大粒の砂粒を含む粗い例も含まれる。口縁部は斜め・横のハケや板ナデが基調で、頸部~胴部の内面は横・斜めナデ、胴部外面は斜め・縦の板ナデ・ナデを基調とし、下腹部の乾燥単位の下はおもにハケである。極めて細かいハケ（14本~20本/cm）と極めて粗いハケ（3本~4本/cm）があり、整然と施される。頸部に三角形とみられる透し孔がある。外面にのみ赤彩が施され、透し孔と開口部付近では赤彩が一部内面にも及ぶ。外見は平底状であるが、底部内側に切り取り面がないもの、端部に輪積痕跡が残るものを含むことから、開放状態で輪積成形し、自重ではみ出た粘土をケズリやナデにより調整した底部c1に当たる。

香取神社古墳（茨城県結城郡八千代町：文献24）

墳丘長約70mの前方後円墳とみられる。内海から鬼怒川を北にやや遡った右岸微高地上にある。現在は

大小の円墳が2基並んでいるように見える。測量調査時に壺形埴輪の良好な資料が採集されている。

採集された壺形埴輪には径37cm以上になる有段口縁がある（第7図60～67）。段からの口縁部高は10cmであり、段の屈曲部に粘土帯を貼り付けているが、全体に丸みを帯びた緩やかな屈曲に仕上がる。器面荒れが著しく、表面が剥がれている。内外面ともハケを基調とし、内面にナデを加えるものがある。内外面に輪積痕跡と輪積成形時の指頭痕が残るものがある。胎土は密なものと同様のものと粗い砂粒を含むものがある。破断面まで赤みを帯びる色調と、激しい器面荒れのため、赤彩の判定は困難である。底部は内側に切り取り面がなく、外面には自重による粘土のはみ出しが残る底部c2であり、開放状態での輪積成形とみられる。

なお、香取神社古墳と同様の底部c2は、茨城県霞ヶ浦町の牛塚古墳で採集例がある（68～73）。口縁部形態が不明なので参考資料として示しておく。

（2）小型古墳の壺形埴輪

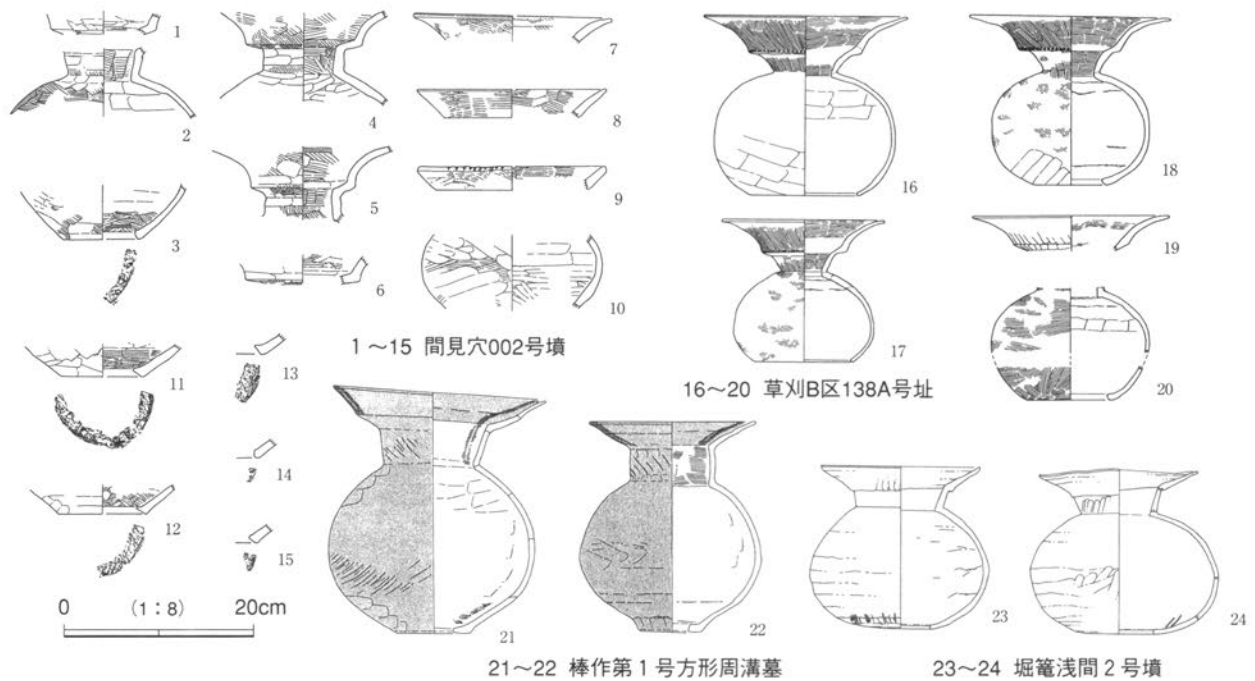
壺形埴輪は上記のように首長墓からの出土例が知られてきたが、以下は認識されにくい小型古墳出土例について十分条件を満たす事例を紹介し、小稿の目的を果たしたい（埴輪：第8図，墳丘：第9図）。

間見穴002号墳（千葉県八千代市島田台：文献25）

一辺21mほどの方墳であるが、台地斜面側が未調査で、前方後方墳（墳丘長30m前後）の可能性がある。千葉県北部、印旛沼地域に所在する。周溝及び周溝内埋葬施設（赤彩の施設：水晶勾玉・緑色凝灰岩管玉2・ガラス小玉出土）のみ検出された。壺形埴輪と著しく特殊な甕が古墳の表層、周溝肩、周溝内に分散して出土し、小型丸底鉢・高杯・直口壺・炉器台などの良好な五領式の土器群は、おもに周溝西側隅部の底付近で集中的に出土した。草刈古墳群土器編年（文献17、26）Ⅱ期に併行する。

壺形埴輪は6個体以上認められる。口径20cm～21cm，胴径19cm～22cm，底径8cm～9cmに揃っており、かなり厚手（5.5mm～10.0mm）で、胎土は砂粒・スコリアをとくに多く含むいわゆる埴輪質である。厚い赤彩が同じ部位に施される。器面に極めて太いハケ（4本～5本/cm）が単純かつ明瞭に挽かれ、これに荒々しいナデが加わる。1～3，4，5，6・7が、中膨らみの直立頸部が特徴的な、有段口縁Bの4個体である。8は胴部で、やや下膨れ形とみられる。9・10は前記4個体とは別地点の表層から出土した、折返し口縁Cの2個体である。器壁厚，胎土，調整，焼成，赤彩などは有段口縁と同質である。折返しは扁平で厚みがなく、幅広である。端部にハケ刻みを有する。11～15の底部は出土地点等から、有段口縁の個体とみられる。平底の面はまったくなく、開口端部がギザギザの底部b2が主体的である。ギザギザは密な幅4mm以下の棒状圧痕（刺傷）で、方向と間隔が不規則で、×状に交差する部分もある。未乾燥の柔らかい状態に付けられたもので、粘土は内面にめくれている。開口部外周は成形終了後に自重で潰れ、わずかに平らな面が生じている。赤彩が施され、12～14では底端部面でも確認できる。内面のハケの様子から、開口部の存在を意識しながら調整が施された可能性が高い。底部は最初から輪の状態か、平底にせよ丸底にせよ早い段階で切り離され、その後に調整が施されたとみられる。

つまり、間見穴002号墳例は、複数の個体が墳丘から各所に転落した可能性が高く、大きさ、厚さ、太いハケ、粗い胎土、赤彩等の細部で同じ特徴をもつ。これらは壺形埴輪の必要条件である。長胴、長頸ではないが、当初から輪の状態か、初期の柔軟状態で底を取り去り、成形される。これは日用品からの転用ではなく、古墳に並べる器物への本来的機能（目的）の転換を示し、壺形埴輪の十分条件を満たす。



第8図 東関東の壺形埴輪（小型古墳）

草刈B区138A号址（千葉県市原市草刈：文献27）

19m×18mの小規模方墳である。千葉県中央部、東京湾に注ぐ村田川流域に所在する草刈古墳群（総数150基以上）の1基である。群在する前期古墳の中では比較的大きい。埋葬施設は不明であるが、周溝は全周が検出され、北東及び南西側の周溝から壺形埴輪が出土した。ほかに、焼成後穿孔の折返し口縁壺や直口壺、平底甕、小型丸底鉢、小型器台等、草刈古墳群土器編年Ⅱ期の土器群が出土している。

壺形埴輪は少なくとも4個体あり（16～20）、いずれも頸部から外反する有段口縁Dである。口径17cm～22cm、高さ15cm～19cm、胴径15cm～19cmと、同大で均質かつ完璧な相似形をなす。密な胎土、薄手の作り（5mm前後）はいわゆる土師質で、段に刻みを有し、外面を細かく明瞭なハケ、のち胴部にナデが施される。内面はなめらかにナデが施され、肩部に複数条の輪積み痕が明瞭に残る。赤彩は外面と口縁部内面に施される。下端部が遺存する3点に、平底の底面はみられない。報告では焼成後穿孔とされたが、切取り面にヘラナデまたはハケが施され、自重により潰れて切取り面に粘土が突出したり、内部に陥没したりと、柔軟状態での底部切取り（底部b1）に当たり、壺形埴輪の十分条件を備える。

棒作遺跡第1号方形周溝墓（千葉県佐倉市六崎棒作：文献28）

一辺11mは前期の小規模方墳として最も小型の部類である。印旛沼の南側、内海の一部である鹿島川下流の右岸台地上に単独で検出された。隅に陸橋を有する周溝のみ検出され、北隅部と西隅部付近の周溝底から、わずかな間層をおいて、完形に近い「壺」が1点ずつ横たわった状態で出土した。

壺形埴輪としては量的に少ない。口径23cm、高さ25cm、胴径22cmと、口径18cm、高さ22cm、胴径19cmの2個体で、ほぼ同じ形である。有段口縁Bの変異形で、1個体は段部表現が不明瞭である。器壁は比較的薄い。粗いヘラナデ（ケズリ）が特殊である。22の底部形状が平底をしっかりと作り出しているようにみえるが、21は平底への穿孔としては形状的に切取り面が狭すぎ、報告でもその面にヘラ痕跡が明瞭でないとしていることから、開放状態における成形（底部c1）の可能性例として提示する。



第9図 東関東の壺形埴輪出土古墳（小型古墳）

堀籠浅間2号墳（千葉県香取郡大栄町堀籠：文献29）

2基調査されている小規模方墳のうちの1基で、一辺わずか9mという最も小型の部類である。利根川下流に流入する大須賀川は、内海南岸でも大きな入江であり、その奥の台地突端に古墳は位置する。高さ1mの盛土が遺存し、墳丘中央に2.65m×1.65m、深さ0.52mの隅円長方形墓壙が確認されている。埋葬施設からは小型器台片以外に副葬品は確認されなかった。

壺形埴輪としては量的に少ない。ただし周溝内から一緒に出土した2個体はともに口径17cm、高さ17cm、胴径19cmであり、寸分違わぬ形である。有段口縁と折返し口縁の融合、または有段口縁Cである。器面荒れが著しいが、ナデを基調とし、口縁部内外面にはミガキが施され、胴部に輪積み痕が残される。胴部は下膨れ気味である。胎土はとりわけ粗くはなく、比較的薄手である。丸底系譜を含む底部b1に該当する。焼成前に切り取られており、径6cmほどの開口部はやや卵形に歪んでいる。

（3）東関東における壺形埴輪の性格

新皇塚古墳、上出島2号墳、香取神社古墳の例は透し孔を有するものや、底部開放状態から筒状に成形されるものである。しゃくし塚古墳、大厩浅間様古墳の例は、焼成前に地面と平行に切り取られている。これらは厚手、大型、そしていずれも頸部が長めに復原でき、胴部が長くなったものを含む。器面がなめらかな新皇塚古墳を除くと、粗く太いハケを基調とし、これに粗いナデが加わる。土師器壺のようなミガキが施されることはない。より埴輪に近い質といえる。十分条件を満たすこれらの壺形埴輪は、上記のように、墳丘長40m超の大型円墳、前方後方墳、前方後円墳という明白な首長墓から出土している。

これに対し、間見穴002号墳は21mの方墳、またはせいぜい30m前後の前方後方墳である。このような小型古墳から十分条件を備えた壺形埴輪が出土したのは意外なことで、その目で見直すと、東関東の前期古墳資料にはほかにも類例が見いだせる。草刈B区138A号址（小規模方墳）では、同じような「壺」が複数（4個以上）出土しており、焼成前の柔軟状態ですでに開放されている点で十分条件を備えている。底部切り面や器面がなめらかに調整される薄手の草刈B区138A号址例と、開口部無調整で器面の調整も粗い厚手の間見穴002号墳例では、口縁部形状を含めて相違は大きい。しかし、上記の首長墓における壺形埴輪と比較すると、小型で、頸は短く、胴丸である点で、むしろよく似ている。

間見穴002号墳例で注目されるのは、二系統の形（1：折返し口縁壺と2：有段口縁壺）があることである。1の底部片が出土しておらず、出土位置の相違から1と2の扱い方に区別があった可能性のあることなど不明な部分もあるが、大きさの共有、一般の壺とは異なる特殊な調整や胎土の共有など、両者が質的に同じである点が特筆される。出土量では2が主体的で、外来要素が濃い。その中で、1を併用することは、地元の古式土師器＝五領式に含まれる在来系の壺を取り入れて埴輪化したという事実を物語ってお

り、壺形埴輪の柔軟性と包容力、または二面性が読みとれる。

この柔軟性こそ、壺形埴輪と土師器壺とをなかなか分離して扱えなかった原因でもある。

同様の視角を、大型古墳出土の壺形埴輪に向けると、やはり有段口縁の系譜だけでは説明しがたい例を含む。大厩浅間様古墳と上出島2号墳例は、資料によっては段がなく、手法的には折返し口縁である。

これらの特徴を示すのが、東関東の大型古墳から出土した壺形埴輪であるわけで、大型で頸が長い、胴が長いなどの著しい特殊性をそこに見いだすことができることは、小型古墳から出土する壺形埴輪に、小型で、外来の有段口縁壺とそっくりの形を見いだすことができることと、まったく対照的である。間見穴002号墳例は近畿系とされる有段B、草刈B区138A号址例は伊勢系といわれる有段D、ほかの例も変形してはいるが、有段Bの直立した短い筒状頸部をもつ。両者の違いが時期差の産物である可能性もある。しかし、その隔たりを内部の連続的变化で説明することは難しい。先述の比田井克仁は有段Bが地域に定着し伝統化することを指摘しており、一方で、以前に私どもが指摘したとおり、古墳が大型であるほど出土土器の特殊性が進むとすると（文献7）、両者が併存するに至ったとしても不思議ではあるまい。

このように、東関東における壺形埴輪とは、外来の系譜を基本として製作されるものであるが、在来要素を採用することがあり、一部は融合して、豊かなバリエーションを形成した。強い制約はなく、バリエーションは各古墳の造営機会ごとに完結した、そんな文物と考える。

5. 壺形埴輪の系譜とその意味

(1) 壺形埴輪の多様性

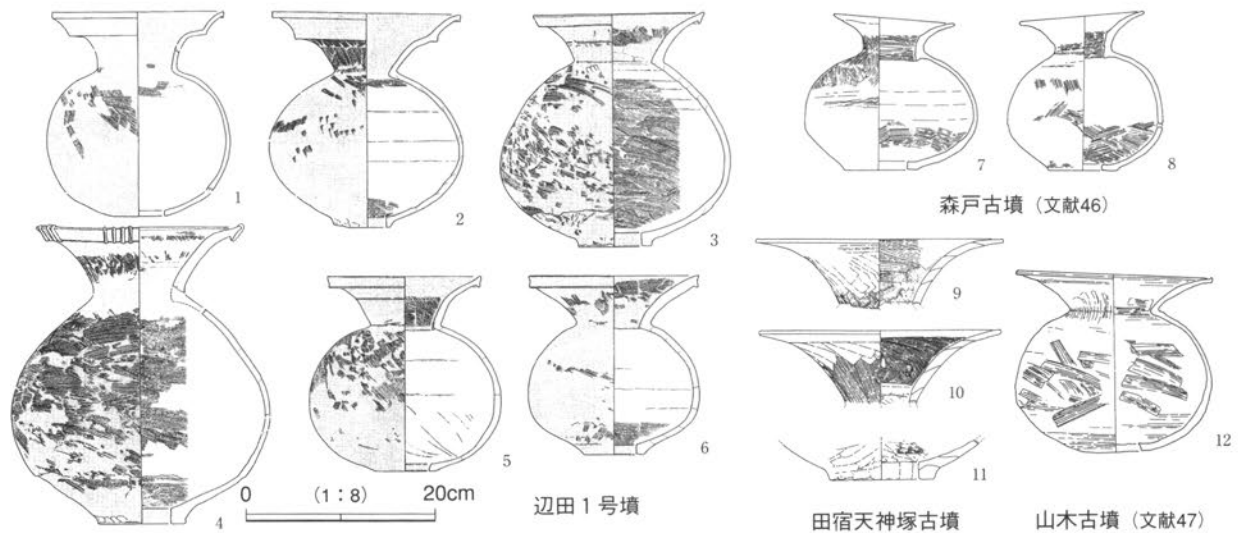
東関東において壺形埴輪の十分条件を満たすものは、大型古墳には大型、小型古墳には小型の例がみられ、大型の例には比較的頸が長いなどの特異な特徴がみられた。これは系譜の相違と理解されよう。

もちろん小型古墳の例では、採りあげた4古墳がすべて異なる口縁部形態であるように⁽¹⁸⁾、いまのところ同一古墳出土品以外で類品を探すことは難しい状況である。二つの系譜どころか、もっと多くの系譜が作用していると考えられる。

壺形埴輪の認識枠を広げ、平底壺への焼成前穿孔=底部aを有する、必要条件が備った例まで含めると、多様性はさらに大きな広がりを見せる。底部aの例は、千葉県能満寺古墳・今富塚山古墳・油殿古墳、茨城県の梵天山古墳⁽¹⁹⁾といった東関東を代表する前期の前方後円墳をはじめ、その数はこれまでに扱った底部b・cの例とは比較にならないほど多くなる。これらすべてを扱うのは小稿の趣旨に沿わないが、壺形埴輪の要件をよく備えた一つの良好な出土例を採りあげ、多様性の問題について補足しておきたい。

市原市辺田1号墳（文献30）では、じつに数十個体の壺形埴輪が報告されている。その一部を第10図に示した。底部b1が1個体含まれるほかは、底部a1・a2に分類されるもので、質がよく似ており、大きさも近似するなど、壺形埴輪の必要条件はすべて満たしている。しかし口縁部は、壺形埴輪として主体を占めるはずの有段口縁は少数にとどまり、逆に、いわば「垂下口縁」といえるようなもの⁽²⁰⁾、折返し口縁（折返しA）、端部に面をもつ単口縁などがあり、かなり多様である。

これらは集落出土資料にほとんどみられない口縁部形態である。多様性の原因が必ずしも地元の土器に求められるわけではないことを示している。また、近くの新皇塚古墳例に比較すると、口縁部、頸部、胴



第10図 千葉県辺田1号墳の壺形埴輪と単口縁の類例

部、底部、大きさ、いずれにおいても差異が大きく、同一系譜とする根拠を見いだすことは困難である。とくに、辺田1号墳例の中で比較的多くを占める単口縁は新皇塚古墳例にみられず、まったくの異系譜である。単口縁は茨城県霞ヶ浦町田宿天神塚古墳（文献12）など東関東の大型古墳に採用例があり、二重口縁とは異なる系譜が小地域を越えて繋がっている可能性は考慮に値する。

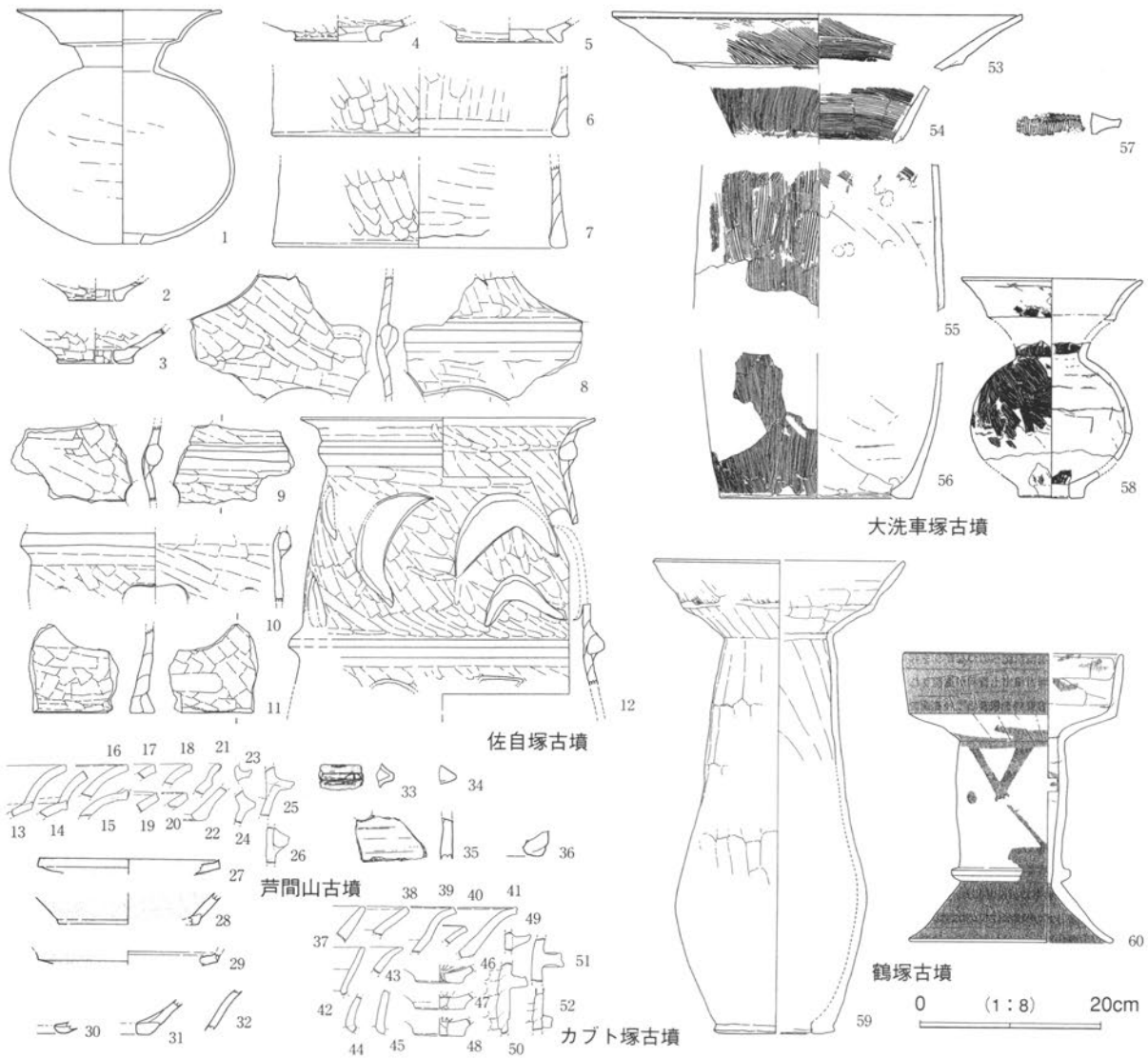
多様性についてももう一例を示しておく。霞ヶ浦の北端、高浜入りの最奥部にあたる茨城県石岡市高浜上野遺跡では（文献31）、溝の底に転落したような状況で、2個の「壺」が出土している（第7図74・75）。古墳の規模や形態が不明で、出土数も少ないため参考資料として扱うが、各個体の出土状態は良好である。厚手で大型、1個体は長胴で、大型古墳出土例に比する大きさと形態を有する。これはしかし、頸部が長くはない。近畿における初期の壺形埴輪に忠実な、有段B、底部b1で、下膨れではなく球胴形をしている。東関東に多い「長頸」の壺形埴輪とは、直接には連続しない可能性が高い。

このように、東関東の壺形埴輪だけでも極めて多様である。複数の系譜を想定せざるをえない。系譜の相違は政治的・社会的意味を反映するとされるが、壺形埴輪がこのように多様で、東日本ではとくに複雑なあり方であるとなると、中央と地方の関係として単純に、一律的な支配体制の存在や、あるいは統制のとれた対抗勢力の存在を想定することは、困難といえよう。

（2）円筒（器台形）埴輪共伴例との違い

円筒（器台形）埴輪と共伴する例と、単独で樹立される例は系譜が違う壺形埴輪である、との指摘について先に触れた。確かに長胴化した壺形埴輪は円筒埴輪と共伴しない例が多い。しかし、上述の単独樹立例は極めて多様性があり、二つの系譜だけでは整理しきれない状況である。同じように、円筒（器台形）埴輪との共伴例も一枚岩ではない。

東関東で共伴が確実な例では、茨城県の八郷町佐自塚古墳（文献12, 32）、玉造町カプト塚古墳（文献13）、大洗町車塚古墳（文献33）、千葉県の印西市鶴塚古墳（文献34）、可能性が高い例では茨城県の下館市芦間山古墳（文献13, 35）がある（第11図）。いずれも大型古墳である。千葉県のしゃくし塚古墳など、



第11図 東関東の円筒（器台形）埴輪伴出例

ほかにも共伴を指摘される例はあるが、現時点では資料が十分ではない。

これらにおける壺形埴輪は、佐自塚古墳例、カプト塚古墳例が底部a1、芦間山古墳例が底部a2である。全容がわかる佐自塚古墳例は、長頸・長胴の特徴は持ち合わせていないが、大洗車塚古墳、鶴塚古墳例は底部c2の超長胴である。限りなく円筒に近いこうした埴輪は、東京湾を渡った神奈川県海老名市秋葉山2号墳（文献36）でも報告され、同じく返子市長柄・桜山1号墳（文献37）では、長頸・長胴を兼ね備えた壺形埴輪が円筒埴輪と共存している。従来の方見よりも入り組んだ様相である。

多様性の問題は壺形埴輪だけに留まらない。茨城県の前期古墳では、岩瀬町長辺寺山古墳のように、近畿には認められない「擬口縁突帯」といった技法の特徴はあるものの、見た目では円筒埴輪といえる例が知られる。長柄・桜山1号墳やカプト塚古墳における円筒埴輪も円筒埴輪の印象から極端に逸脱はしない。ところが、佐自塚古墳出土の器台形埴輪は、立面が台形をなすもので、調整にはハケを多用しない。このような例は少ないものだが確実に類例があり、最も近い類例は群馬県玉村町下郷遺跡で認められる。一方、芦間山古墳例は、全容がわからないが、やはりハケを多用しない破片である。突帯は佐自塚古墳と同じく

極めて太い。さらに、鶴塚古墳は中期初頭の築造と考えられる大型円墳であるが、なんと、器台形の埴輪が共存する。それも、はるか一世紀以上も前の特殊器台を彷彿とさせる奇妙なもので、この先祖帰りについて説明できる類例が見当たらない特殊なものである。こうした器台形埴輪と、表面的には整った円筒埴輪との間にみられる差異は、のちの中期古墳や後期古墳における埴輪の地域性に比べてはるかに隔たりが大きく、異質である。前期古墳の典型的円筒埴輪ではない不整形なそれは、技法段階の問題ではなく、企図する「形」そのものの理解が異なっている、といえる程度に「違う」のである。こうした表現は壺形埴輪の説明にも当てはまるであろう。

このように、円筒（器台形）埴輪ですら、相互に大きな隔たりをもつ系譜を内包しながら受容された。これに伴う壺形埴輪もしかりである。円筒（器台形）埴輪を伴わずに受容される壺形埴輪の系譜がこれらと異なるのは、当然の帰結とさえいえる。つまり、円筒（器台形）埴輪が伴う例と伴わない例は、対立軸にあるものではなく、全体に発露した多様性（技法的問題に留まらない相違を含む）のうち、顕著な部分と認識すべきであろう。

東日本の前期古墳では、多様性の発露がとくに激しかった。その中でも「特殊」な形状に変化し、かつ首長墓出土例に互いの類似性が認められる壺形埴輪こそ長頸・長胴の特徴をもつ例であり、そこに一つの系譜をみてとれると考える。

(3) 「長頸」の壺形埴輪の系譜と変遷

壺形埴輪は古墳の存在を前提とし、そこに樹立する埴輪の成立を前提として生じたものである。問題は、この文物がどの「程度」秩序立ったものかということである。この項目では、多様性はあるが、ある程度類似する枠内で型式変化をたどれる可能性がある、長頸・長胴の特徴をもつ系譜について述べる。

「長頸」の壺形埴輪を樹立する例は、いまのところ首長墓に特有である。東関東で類例が多い点は地域的特徴ということができる。底部b・cを有し、長胴化を起こす特徴がある。

これを単一系譜とみなすことには疑問の余地はある。口縁形態は多様で、相互に連続性を説明できない部分がある。しかし、壺形埴輪は樹立された古墳において完結する遺物群である。そして、他系譜に寛容な部分があり、受容時に各地で地元の壺を要素に取り入れ、渾然一体となっている。胎土や焼成は、混和材の種類（量を除く）や色調などにおいて地元の土師器とよく類似し、基本的に各地元で製作された可能性が高い。したがって、全体的な姿や形のほか、機能面に共通性が認められるのみである。この場合、樹立という機能に直接関係する底部形状がもっとも連続性を見いだせる部分と考える。

「長頸」の壺形埴輪を一系譜と認めてよいなら、底部形状の相違から多少の時期差が想定される。かつて主張したとおり（文献7）、底部形態の退化、「埴輪化」の進行と理解するのがわかりやすい。そこで、

I：底部b1・b2→II：底部c1→III：底部c2

という変化を想定したい。実際の資料では、底部a2とb1、底部b2とc1、底部c1とc2は一つの古墳で共存することがあるなど境界は漸移的であるが、組成を考慮して判断すると、下記の3つの段階が想定される。

I：新皇塚古墳

II：大厩浅間様古墳・しゃくし塚古墳・上出島2号墳

III：香取神社古墳（参考：牛塚古墳）

これらが使用された時期はいつか。上出島2号墳例は、副葬品から古墳時代前期後葉の認識でほぼ一致

しつつある。草刈古墳群土器編年Ⅲ期（以下、草刈～期と記す）に当たる。「長頸」の壺形埴輪におけるⅡ段階はこの付近に位置づけられる。Ⅰ段階はそれより古く、前期中葉以前、草刈Ⅱ期の新しいところまでは遡る可能性が高い。Ⅲ段階は、良好な裏付け資料はないが、古くても前期末以降、新しければ中期前葉に位置づけられる。中期初頭とみられる鶴塚古墳の壺形埴輪は同一系譜上とはいいいにくい、底部形状ではⅢ段階のものと類似しており、併行関係を考える上での傍証となるであろう。

円筒（器台形）共伴例の佐自塚古墳は、伴出土器や副葬品から前期後葉、草刈Ⅲ期併行である。上記のⅡ段階に併行することとなり、系譜を異えた併存関係が確かめられる。小型古墳の間見穴002号墳例は、伴出土器から前期中葉、草刈Ⅱ期併行とみてよい。必要条件が揃っている辺田1号墳も伴出土器からほぼこれと同時期とみられる。上記Ⅰ段階が草刈Ⅱ期の一部に併行するとなると、単独樹立例の場合においても、近い時期にまったく異なる形状の壺形埴輪が存在することとなる。系譜の違いは明らかといえよう。

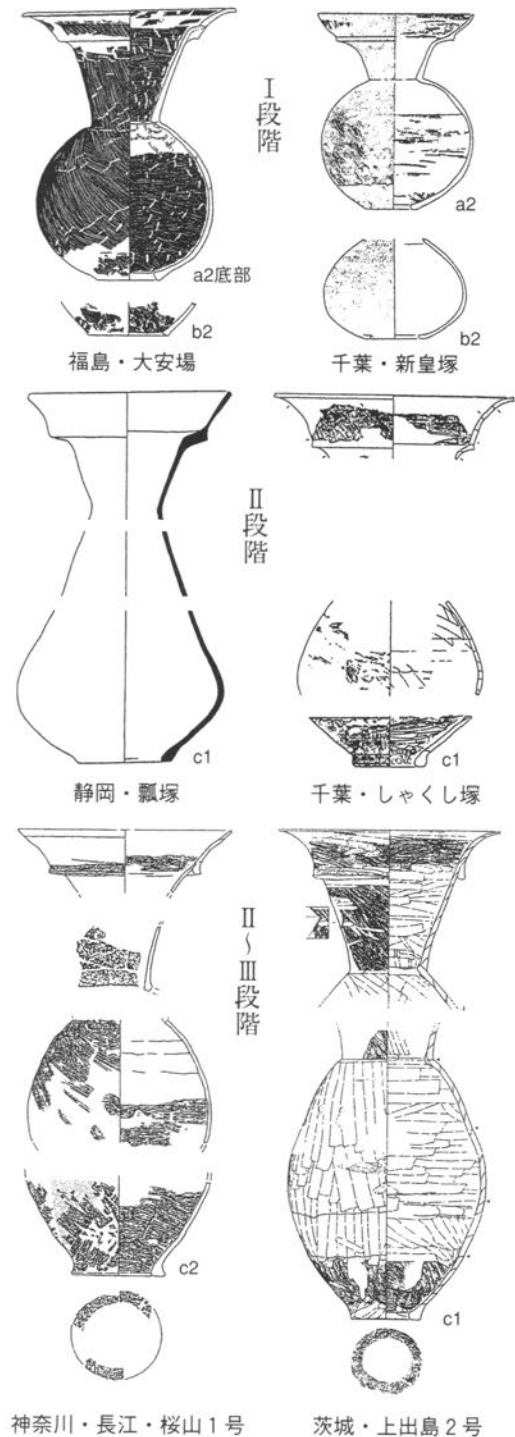
（4）壺形埴輪の多様性が意味するところ

長頸の壺形埴輪に関して、千葉県市原市の今富塚山古墳例は底部a1（平底に焼成前穿孔）をもつ長頸壺形の可能性があるが、これ以外に祖形候補は見当たらない。東関東の大型前方後円墳からこれらが必ず出土するわけでもないので、地域独自の文物とはいえない。古墳に樹立する埴輪である以上、王権に連なる何処からか受容したのであり、受容経路の解明は、相互の結びつきを解明することでもある。

長頸の特徴に注視すると、福島県郡山市の大安場古墳（文献38）、静岡県掛川市の瓢塚古墳（文献39）、神奈川県逗子市の長江・桜山1号墳（文献37）から出土した例がとりわけ類似している（第12図）。

大安場古墳例は胴丸で、底部b1ないしb2、外面をハケで覆われ、赤彩されているものが多い。全体形や作りの質は統一されているのに、口縁部が二種類（有段口縁の特徴を残すもの、「垂下口縁」+棒状浮文の特徴をもつもの）あり、外来要素と在来要素の顕著な混在という二面性がここでも読み取れる⁽²¹⁾。有段口縁は新皇塚古墳例をより長頸化・大型化した形状で、細部は大厩浅間様古墳例に近い。

瓢塚古墳例は独特の縦長円錐形をなす肩部の形状が著名



第12図 「長頸」壺形埴輪の系譜と類例
(S = 1/12)

であるが、肩部付近が上下に接点のない破片で復原された資料であるので、実際はもう少し短胴の下膨れ形である可能性が高い。底部は器面荒れが著しく、平底を作り出しているようにもみえるが、形態的には底部c1である可能性が高い。萩原恭一の指摘どおり、千葉県のかくし塚古墳例との類似度（文献34）は、かなり高いと考える。

長江・桜山1号墳例は底部c1・c2である。伴出の円筒埴輪と切り離して論じるべきではないが、折返し系の口縁部、長胴気味、なで肩の胴部、高さとは幅はいずれも上出島2号墳例に酷似しているため、類例には加えざるをえない。なお、長柄・桜山1号墳は房総半島からみて東京湾のすぐ対岸である三浦半島付近に所在し、すぐ近くには同様の壺形埴輪を出土した逗子市うつき野遺跡例（文献40）がある。

底部a1（平底に焼成前穿孔）を加えて長頸・長胴例を探すと、埼玉県川越市三変稲荷神社古墳、三重県松阪市深長古墳等がある。三重県の例の存在から、これらを伊勢系の一種とみる意見もあろう。ただし、類似度ではやや遠い存在で、現時点でこれらを祖形とし、その後の時間経過による展開を描ききることは難しい。

以上の類例から気がつくことは、太平洋岸に点々と分布しているようにみえる点である。これらの点を線で結んだ太平洋ルートの結びつきが存在したのではあるまいか。東海東部を橋渡しとしたネットワークと考えると、以前に上出島2号墳出土鉄鍬を再検討した際に指摘した、静岡市三池平古墳出土鉄鍬との組成の類似性がその傍証として浮上してくる（文献23）。

壺形埴輪は地元の要素を入れながら古墳造営機会ごとに完結し、円筒埴輪の高い画一性に比べて格段に低い画一性しかもたない。それぞれに在来要素を加味することから察するに、造営主の結びつきはまるで伝言ゲームのようなごく間接的なものであって、そこに強固な支配系列、または強固な地域的結合による独立勢力は想定しにくい。つまり、近畿に連なるとはいえ、直結する性格のものではないと考える。

6. まとめ

壺形埴輪は、古墳の成立に伴い、古墳専用の器物として生みだされた。円筒埴輪と比較すると古式土師器との親縁性は濃いだが、底部穿孔の土師器壺とは識別する必要がある。小型古墳の調査では壺形埴輪を見逃しがちなので、とくに注意が必要である。小型古墳と大型古墳の壺形埴輪は異系譜である可能性が高く、さらに大型古墳例の中にも多くの系譜が内包されている。東関東の首長墓に多い系譜の一つは、現状では太平洋沿岸に点々と類例が分布するので、古墳造営主はこの経路で結びついていた可能性がある。古墳時代開始期から太平洋沿岸の動線がやや太くなると考えており、その証拠の一端を示しえたと考える。ただし、壺形埴輪の要素からいって、この結びつきは基本的に二者間関係の連鎖という、数珠繋ぎ的な様相を保っていたもので、ヤマト王権の傘下に連なっているが、極めて間接的な関係に留まっていたと考える。

古墳時代前期の東日本では、社会的に水上交通への志向性が極度に高まっていた（文献41）。これは、東日本が自前で供給できない金属などの物資を入手する必要からとみられる。しかし、供給元に近い西日本において、瀬戸内海や日本海沿岸に限られてしまう水運上の大動脈を、一つの王権が押さえてしまったとすれば、東の地域集団は王権の傘下に連なる以外の選択肢はほとんどない。西方の集団と関係を保って交通を確保しておくことが、強い社会的要請に基づいていたものであるなら、方向性はおのずと定まると

ころであろう。ただし、動線上にはなお多くの集団が存在し、各地域社会が必ずしも王権中枢との直接的関係を必要としていたわけではなかったかもしれない⁽²²⁾。

最後に強調しておきたいのは、様々な種類（ルートの違いや結びつき方の違い）のネットワークが併存した可能性が高いことである⁽²³⁾。ルートの違いによる特質や変遷は次稿に譲るが、少なくとも東日本の古墳造営主は複数ある選択肢の中で一つないし幾つかを選択して交通を確保しようと運動し、結果的にヤマト王権とのつながりをもつに至った。壺形埴輪などにみられる多様性は、地域のこうした運動の痕跡ではなかろうか。擬制的なものも含めて、血縁関係などを紐帯とした場合もあったかもしれないが、もし出自や身分が固定化されていったとしても、すでに存在していた制度に組み込まれたのではなく、各地域集団の運動の結果が、やがて既成事実化していったのではないかと考える。

小稿執筆に当たり大谷弘幸氏、塩谷修氏、滝沢誠氏、新山保和氏、萩原恭一氏に資料の実見と論旨に関するご教示を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

註

- (1) 千葉県北部と茨城県南部は、低平な常総台地と低湿地が入り組んだ微地形の連続で、水に恵まれた水郷地帯として同様の環境があり、内海を通じて歴史的にも水上のつながりが強い地域である。したがって両県域を分離せずに「東関東」とする。
- (2) 例えば、かつて副葬品編年（文献7）に照らすとズレがあると指摘した壺の編年観（文献5、6）は、壺形埴輪を他の底部穿孔壺と同列に扱っており、さらに編年の軸に廻間式土器編年を置いている。埴輪定義の厳格化に伴い「壺」が切り離されたのは研究史上の流れであり、結果として、その「壺」に埴輪以外の目盛りを適用せざるをえないかたちになっている。
- (3) この場合は、次章で説明する小稿の有段口縁B・C類を「有段口縁」、有段口縁D類等を「二重口縁」、折返し口縁を「複合口縁」と呼んでいる。
- (4) 塩谷はさらに、5）あるいは、樹立・配列された器台形・円筒形埴輪と結合する、を挙げる。ただし、4）までと5）は別のものをさす指標なので、ここでは4）までを示した。塩谷自身も、4）までを満たす壺形単独の「壺形埴輪A」と、5）を満たす器台形伴出の「壺形埴輪B」を区別して扱っている。
- (5) 圍繞配列とは、墳丘平坦面などを囲い込む形の配列である。最近では、古屋紀之（文献9）君嶋俊之（文献10）らが強く主張する。後者はのちに「形象化」が壺形埴輪の要件であるとして、圍繞配列を重要視しながらも壺形埴輪の定義からは切り離している（文献11）。
- (6) 底部b1は丸底の穿孔である可能性が高いが、平底の可能性も排除はできない。丸底は関東に根付かない特徴であり、丸底であるとすれば特殊性がいっそう際立つ。その場合は、近畿の壺形埴輪と直接的な関係を想定してよい。その意味では、関東の地域的な要素として、底部b1であることも十分条件に数えてよいかもしれない。
- (7) 田中新史は有段口縁における焼成後穿孔壺と焼成前穿孔壺とを分け、さらに埴輪と同じく元から開口して作るものを「埴輪壺」と規定して区別することを主張する（文献13）。その中で、焼成前穿孔壺への変化を壺の「特化」と表現した点は、「特殊化」の意であろう。経済用語の「特化」は、「特殊化」とは異なる意味のテクニカル・タームであるが、そのままでは文章を正確に読みとることはできない。とはいえ、主張するところは私どもが従来、不分明部分を含めて「壺形土器・壺形埴輪」を併用しつつ、当初から輪の状態で積み上げる手法を採用するものを名実ともに「壺形埴輪」とであると主張してきた（文献7、22）点と、呼称こそ違おうが本質的に同じである。多くの場合、塩谷の指標を満たせば壺形埴輪と認めてよいが、底部a1・a2の焼成前穿孔壺は集落の竪穴住居跡からも出土することがあり（例えば印西市松崎Ⅱ遺跡SI-037など）、それと壺形埴輪を

区別するには、3)、4)という、個体では識別できない指標に拠らねばならない。底部a1・a2の焼成前穿孔壺には、集落使用の壺に近い要素を残すものも含まれるといえる。

- (8) 大型土器を作る際、混和材の増加傾向は通時的に認められるが、埴輪におけるその程度は著しいもので、いわゆる「埴輪質」は特殊器台の段階では認められない、埴輪特有のものである。出土例によって差が著しいため、指標としての信頼度は残念ながら確保されず、参考とするのが適当と考える。
- (9) 仮に理念上の相違を認めたとしても、実態がかなり不分明であれば、政治的に意味をなさない。実際、新皇塚古墳例などはD類にされるが、同じ壺形埴輪にもC類に近い個体がある。
- (10) 千葉県内資料で見ると、集落等の遺跡では三ツ堀遺跡、村田服部遺跡、草刈六之台遺跡、宮脇遺跡、小滝涼源寺遺跡などにみられる程度である。古墳は集落に比べて壺の出土率が2倍～3倍に達する(文献7)が、良好な資料は少なく、北ノ作2号墳、飯郷作D06号墳、草刈B区484号址、草刈3号墳等にとどまる。1片を出土した草刈3号墳が最大の円墳であるが、最上位者ではない。
- (11) 壺の種類は一般的に口縁部形態で大別される。使用頻度が高いのは「二重口縁・複合口縁・有段口縁・折返し口縁」の4語であろう。この4語はしばしば矛盾した用例に接する。「複合口縁」は構造の側面、「二重口縁・有段口縁」は見かけの側面が強く、意味合いの相違も混乱の一因であろう。古くから使用される「二重口縁」は当初から曖昧であり、用例でも「有段口縁」と同義の場合と、「有段口縁」を含むさらに広義の場合とがある。「折返し口縁」も「二重口縁」と呼ばれることが多い。小稿は、「二重口縁」について広義の用例に従い(文献15)、その中に「有段口縁」と「折返し口縁」等を含めて使用する。なお、小稿の視角は、一定の遺物群をさす語として共通理解度が高い「有段口縁」に対し、「折返し口縁」等が混同される用例が少ない点に着目し、むしろ両者の違いを軸に比較することにあるので、誤解の種は少ないものとする。
- (12) 比田井克仁が扱った「二重口縁壺」は狭義の意で用いられており、小稿の有段口縁壺と同義である(文献16)。
- (13) 三重県は、地域表記では、一応東海に含めておく。ただし、近畿との関連が強いことは否めない。
- (14) 五領式期の関東周辺では、甕に明確な地域差があり、とくに素口縁の台付甕、平底甕、そして「石田川式」を代表するS字状口縁台付甕の3種が入り組みながら分布している(文献17)。このうち、S字甕は東海西部を代表する甕、素口縁台付甕は弥生町式からの伝統及び三河地域等との共通性が注目される甕である。房総半島に多い平底甕は、近畿のタタキ甕との関係で論じられる。
- (15) 埼玉県児玉郡美里町南志渡川遺跡では、比較的忠実な4号墳例をはじめ、文様が崩れて有段口縁化した1・2・5号墳例などが出土している。
- (16) 埋葬施設が細く短い割竹形木棺が2基並んで営まれること、滑石製白玉と鉄製品からなる副葬品等が中期的様相を示す。墳丘表土中出土の和泉式の高杯(文献19:P.39第21図31)の存在と合致する。
- (17) 円筒埴輪片の可能性が指摘された、内面斜めハケの採集例(文献20:P.138第5図7等)は、壺形埴輪頸部～段部間の資料としてもありうる。報告の傾きであれば長頸を想定すべきである。底部2種類のうちより短胴の壺をのせる器台形(円筒)の存在可能性はあるが、荻が慎重であるように、報告資料はいずれも壺形の可能性を排除できない。
- (18) 二重口縁の中でも、有段B、有段D、折返しの有段が融合、有段の変形がみられる。底部aを含むと、市原市姉崎東原B29号墳のように、折返し例も加わる。
- (19) 茨城県北部の梵天山古墳は前期古墳としては関東屈指の大前方後円墳である。その周囲には直径100mという巨大円墳などからなる梵天山古墳群が形成されている。梵天山古墳が底部a1の例であるのに対し、底部c1・c2の壺形または円筒(器台形)埴輪とみられる破片が採集されており、同一の古墳群においても様相が異なってくる。
- (20) 「垂下口縁」の用法は一般的でないが、混用を割けるために東海の「パレス壺」系譜によくみられる、折り返された口縁端部

が器壁に密着せず、直下に垂れ下がるものを、便宜的にこう表現しておく。

- (21) 垂下口縁に棒状浮文を付ける壺は、関東には少なく、福島県内には多くみられる。棒状浮文の数が多点で著しく変容しているが、「パレス壺」系譜の変容した壺が定着し、在来化していた可能性がある。
- (22) なお、このことを考える上で最も難しい問題として、九州の壺形埴輪系譜の問題がある。東関東とは形態の相違点は多いが、前期後半の福岡県老司古墳例のように、「底部を製作時から解放して円筒埴輪のように底が抜けている長胴のタイプ」(文献42)が認められる点ではよく似ている。小稿の分析では強い統制が想定しがたいわけであるが、王権中枢を飛び越えた遠距離で、類似性が認められることをどう評価するかは大きな問題である。ヤマト王権の傘下とはいえ、さらに遠距離で結びつくことがあると、問題は複雑化する。長頸・長胴の系譜には、ほかに石川県長坂二子塚古墳例のような飛地的な類例があることも、この問題点と関連する。
- (23) 伊勢型二重口縁壺を命名した田口一郎は、その種の壺(または壺形埴輪)も東海から太平洋沿岸に分布することから水上交通によってもたらされたことを想定している(文献43)。その時期は小稿で扱った資料より古い例が含まれるので、長頸・長胴系譜の背景となったつながりに先立つネットワークの存在は確実である。ただし、伊勢型二重口縁壺には前期後半に下るものがあり、現状では長頸・長胴の系譜が伊勢型二重口縁壺に直結するとは必ずしもいえないことから、伊勢型二重口縁壺のつながりがそのまま引き継がれたものとはいえない。むしろ、同じ地理的線上にあっても様々な結びつき方があったと考える。

引用文献

- 文献1 都出比呂志 1989「古墳時代の中央と地方」『古墳時代の王と民衆』古代史復元6 講談社
- 文献2 白石太郎 2001『古墳とその時代』日本史リブレット4 山川出版社
- 文献3 近藤義郎・春成秀爾 1967「埴輪の起源」『考古学研究』13-3
- 文献4 廣瀬 覚 2001「茶臼山型二重口縁壺と前期古墳の朝顔形埴輪」『立命館大学考古学論集』Ⅱ 立命館大学考古学研究室
- 文献5 古屋紀之 1998「墳墓における土器配列の系譜と意義」『駿台史学』104
- 文献6 新名 強 2000「二重口縁壺からみた伊勢湾岸」『S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局
- 文献7 田中 裕 2000「編年的研究にみる前期古墳の展開」『千葉県文化財センター研究紀要』21
- 文献8 塩谷 修 1992「壺形埴輪の性格」『博古研究』3
- 文献9 古屋紀之 2004「底部穿孔壺による圍繞配列の展開と特質－関東・東北の古墳時代前期の墳墓を中心に－」『土曜考古』28
- 文献10 君嶋俊行 2000「関東地方における壺形埴輪の成立に関する覚書」『奥津城研究』創刊号
- 文献11 君嶋俊行 2002「関東地方における壺形埴輪の成立過程－「圍繞配列」の受容と歴史的意義－」『土曜考古』26
- 文献12 田中 裕・日高 慎 1996「茨城県出島村田宿天神塚古墳の測量調査」『筑波大学先史学・考古学研究』7
- 文献13 田中新史 2002「有段口縁壺の成立と展開－特化への道程・類別と2地域の分析－」『土筆』6
- 文献14 稲村 繁 1999「関東前期の様相」『埴輪が語る科野のクニ』シナノクニフォーラムシリーズ第2巻 更埴市森將軍塚古墳館
- 文献15 桐原 健 1968「二重口縁をもつ土器の系譜と性格」『考古学研究』15-1
- 文献16 比田井克仁 1995「二重口縁壺の東国波及」『古代』100
- 文献17 田中 裕 2002「五領式から和泉式への転換と中期古墳の成立」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』11 帝京大学山梨文化財研究所
- 文献18 斎木 勝ほか 1974『市原市菊間遺跡』財団法人千葉県都市公社

- 文献19 浅利幸一・田所 真 1999『市原市大厩浅間様古墳調査報告書』財団法人市原市文化財センター
- 文献20 荻悦久 1993「千葉県多古町しゃくし塚古墳の有段口縁壺」『古代』96
- 文献21 千葉県教育委員会 1991『千葉県重要古墳群測量調査報告書-山武地区古墳群(3)-』
- 文献22 大森信英ほか 1976『上出島古墳群』岩井市教育委員会
- 文献23 日高 慎・田中 裕 1996「上出島2号墳出土遺物の再検討」『岩井市の遺跡Ⅱ』岩井市
- 文献24 白石典之・谷中 隆 1991『古墳測量調査報告書Ⅰ-茨城南部古代地域史研究-』筑波大学歴史・人類学系
- 文献25 田中 裕ほか 2004『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書3-八千代市間見穴遺跡-』財団法人千葉県文化財センター
- 文献26 加藤修司 2000「土器編年」『千葉県文化財センター研究紀要』21
- 文献27 高田 博 1986『千原台ニュータウンⅢ』草刈遺跡(B区) 財団法人千葉県文化財センター
- 文献28 柿沼修平 1985『棒作遺跡発掘調査報告』佐倉市棒作遺跡調査会
- 文献29 福間 元 1984『千葉県香取郡大栄町堀籠浅間古墳』堀籠浅間古墳群調査会
- 文献30 木對和紀 2004『市原市辺田古墳群・御林跡遺跡-上総国分寺台遺跡調査報告12-』市原市文化財センター調査報告書89
市原市教育委員会
- 文献31 土生朗治 2000「茨城県石岡市上野遺跡出土壺形土器について」『山武考古学研究所年報』18
- 文献32 佐自塚古墳調査団 1963『佐自塚古墳調査概要』茨城県教育委員会
- 文献33 白石真理 1998「大洗町車塚古墳採集資料について」『常総台地』14
- 文献34 萩原恭一 1994「房総における埴輪の変遷と分布」『千葉県文化財センター研究紀要』15
- 文献35 三木ますみ 1991「芦間山古墳」『古墳測量調査報告書Ⅰ』筑波大学先史学・考古学研究調査報告5筑波大学歴史・人類学系
- 文献36 押方みはる・山口正憲ほか 2002『秋葉山古墳群1・2・3号墳発掘調査報告書-第5~9次調査-』海老名市教育委員会
- 文献37 依田亮一・柏木善治 2001『長柄・桜山1・2号墳』神奈川県教育委員会・財団法人かながわ考古学財団
- 文献38 工藤雅樹ほか 1998『大安場古墳群 第2次発掘調査報告』郡山市教育委員会
- 文献39 内藤 晃 1972『瓢塚古墳出土の土器』『土師式土器集成』2東京堂出版
- 文献40 阿部友寿ほか 2004『桜山うつき野遺跡』かながわ考古学財団調査報告163 財団法人かながわ考古学財団
- 文献41 田中 裕 2005「国家形成初期における水上交通志向の村落群-千葉県印旛沼西部地域を例として-」『海と考古学』六一書房
- 文献42 田中裕介 2000「九州における壺形埴輪の展開と二・三の問題」『古墳発生前後の社会像-北部九州及びその周辺の地域相と諸問題』古文化研究会第100回例会記念シンポジウム九州古文化研究会
- 文献43 田口一郎 2000「北関東西部におけるS字口縁甕の波及と定着」『S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局
- 文献44 中村一郎・笠野毅 1976「大市墓の出土品」『書陵部紀要』27
- 文献45 上田宏範・中村春寿 1961『桜井茶臼山古墳 附櫛山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第19冊 奈良県教育委員会
- 文献46 郡司良一 1973「常澄村森戸遺跡の底部穿孔土器」『茨城考古学』5
- 文献47 上川名昭ほか 1972『茨城県筑波町山木古墳』茨城県考古学会